

大使コラム（2012年2月）

2月、今年のリスボンは雨の日が少なく、テージョ川に生ずる濃霧も数える程しかありません。このままでは水不足になる、と心配する向きもあるようです。

1月には、用務で日本に帰る機会がありました。東京での会議のあと福島県を訪れ、被災地の復旧・復興作業や放射能汚染の除去作業などを視察しました。県知事や相馬市長をはじめ地元の方々から、全力で取り組んでおられる様子をお聞きし、ご苦労に頭が下がる思いとともに、我々も出来る限りの協力をしなければと改めて感じました。

その後、ポルトガルと姉妹関係にある徳島市と種子島（西之表市）をそれぞれ訪問しました。

徳島市には明治末から昭和の初めまで、ポルトガルや西欧社会に日本や徳島を紹介する文書を多数残したヴェンセスラウ・デ・モラエスが住んでいました。徳島市長とは、今後の交流促進についてお話しをさせていただき、姉妹都市のレイリア市長が近く経済関係者を連れて徳島を訪問したいとの伝言もお伝えしました。徳島ポルトガル協会のご案内でモラエスの事跡を視察し、また地元の関係者と経済交流についてお話する機会もありました。

昨年9月にレイリヤ市を訪れた縁で、徳島市の企業がそのワインを輸入する話が進んでいるとの嬉しいお話も伺いました。来年はモラエスが徳島に移り住んで100周年にあたります。大使館もこのような機会に、経済面も含めた交流発展への支援に務めたいと考えています。

種子島では、姉妹都市のヴィラ・ド・ビスポ市の市長から西之表市長に宛てた親書をお渡しました。ポルトガルの経済困難を背景に、ここでも経済交流を進めたいとのご意向です。市当局や教育、文化交流の関係者、経済・観光団体の方々とは、若い人の交流や種子島経済（観光）にも寄与する交流計画を考えようと話し合いました。大使館も応援したいと思っています。

来年は種子島にポルトガル人が漂着し、鉄砲が伝来してから470周年です。彼らが上陸した門倉岬は、島の南端の切り立った崖の下に狭い浜辺が続くところでした。遠くに「宇宙センター」のロケット発射台が見渡せるこの風景は、欧州人が初めて日本に來訪した歴史の記憶と不思議なコントラストを感じさせるものでした。

今回の日本滞在は、リスボン市長が東京でのアジア・欧州「市長会議」で初めて訪日した日程と重なりました。この機会に、ポルトガル社会党の重鎮である同市長を国会のポルトガル友好議員連盟会長や外務省の政務官にご紹介し、また都内や地方での視察実施にも協力させていただきました。リスボン市長は日本文化の他、防

災関連の行政やスマートシティ計画等も熱心に視察し、忙しい日程をこなして帰国されました。右訪日が、リスボン市と日本との距離をさらに近づける布石になれば幸いです。

少し当地を離れている間に、ポルトガルを巡る経済情勢も動いていました。増税と政府支出の削減は、マクロ経済の面だけでなく、人々の生活にも暗い影を落として来ています。小売店の顧客数や自動車の交通量が少し減少してきたように観察されます。ポルトガル国債は、格付けのさらなる引き下げをきっかけに利子率が急騰し、政府は否定していますが、財政支援の上積みの必要性まで論評されています。

政府はトロイカとの政策合意に沿い、例えば労働法の改正（雇用条件の緩和による労働市場の流動性強化等）に向けて、労使双方の代表と合意を取り付けました。しかし、共産党系の労組は右合意を拒否するなど、労働組合にも反発を強める向きが出てきています。財政赤字に関する昨年の目標数値は、トロイカとの合意をクリアしたようですが、国民生活への影響はさらに増していくでしょう。この国が厳しい現実はどう対処していくのか、注意深く見守っていきたいと思っています。

皆様には、時節柄ご自愛の程をお祈り申し上げます。